2025 年 IWC/日本共同 北太平洋鯨類目視調査の実施について
IWC-POWER 調査航海：調査船の出港

令和 7 年 7 月 18 日
指定鯨類科学調査法人
一般財団法人日本鯨類研究所

1. 経緯

本調査は IWC（国際捕鯨委員会）と日本が共同で実施しているもので、IWC では通称 IWC-POWER (International Whaling Commission/Pacific Ocean Whale and Ecosystem Research) と呼ばれています。この調査は、2009 年度まで南極海で行われていた成功例として世界的に高い評価を得ている IWC の調査計画 IWC/SOWER(International Whaling Commission/Southern Ocean Whale and Ecosystem Research：南大洋鯨類生態系調査、1996/97 年度～2009/2010 年度)での経験と実績を踏まえ、そのノウハウ等を活用して、IWC 科学委員会の主要研究計画に基づき、2010 年度より毎年夏期に実施されています。

昨年までの 15 年間の調査では、主に北東太平洋を広く調査し、過去数十年にわたって広域的な鯨類目視調査が実施されていなかった北緯 40 度以北のアラスカ湾海域において多数のナガスクジラやイワシクジラが発見されたほか、北緯 40 度以南の海域では多数のニタリクジラやマッコウクジラが発見され、これら鯨種の客観的な資源評価に貢献する貴重なデータが収集されてきました。また、希少種であるシロナガスクジラやセミクジラの分布情報も収集されてきました。

今回は、その第 16 回目の調査航海（短期調査の最終年）となります。米国政府の多大な協力の下に、昨年に引き続き北極海（チュクチ海南部：米国 EEZ 内）においてコククジラを主対象とした調査を行う他、ベーリング海の中央海域（米国の排他的経済水域内北緯 69 度線以南、アリューシャン列島以北、東経 167 度以東、西経 170 度線以西の海域）を対象に、米国と日本からそれぞれ 2 名、合計 4 名の国際調査員により、7 月 22 日から 10 月 9 日にかけて調査を実施します。

2. 調査計画の概要

本調査は、IWC と日本の共同調査であり、IWC 科学委員会がその計画の策定を行い、同委員会内に設置された POWER 運営グループ（コンビーナー：松岡耕二・（一財）日本鯨類研究所）が計画の立案と結果の分析を主導します。また、当研究所が水産庁から委託を受け、調査航海を実施します。本年の調査計画の概要は、以下のとおりです。

2.1 主要調査目的：

(1) ザトウクジラ及びコククジラの資源評価に関する情報の収集
(2) 希少種であるセミクジラの分布、系群構造に関する情報の収集
(3) 資源情報が不足しているその他の鯨類資源について資源量と系群構造に関する情報の収集

(4) 中長期計画を策定するために必要な海洋データ(海水温、漂流物等)を含む基礎情報の収集

2.2 調査期間:

2025 年 7 月 22 日－10 月 9 日(80 日間)

2.3. 調査海域:

チュクチ海およびベーリング海の一部海域(図1)。

アラスカのダッチハーバー港に寄港し米国調査員の乗下船や調査資材の積下ろしを行います。

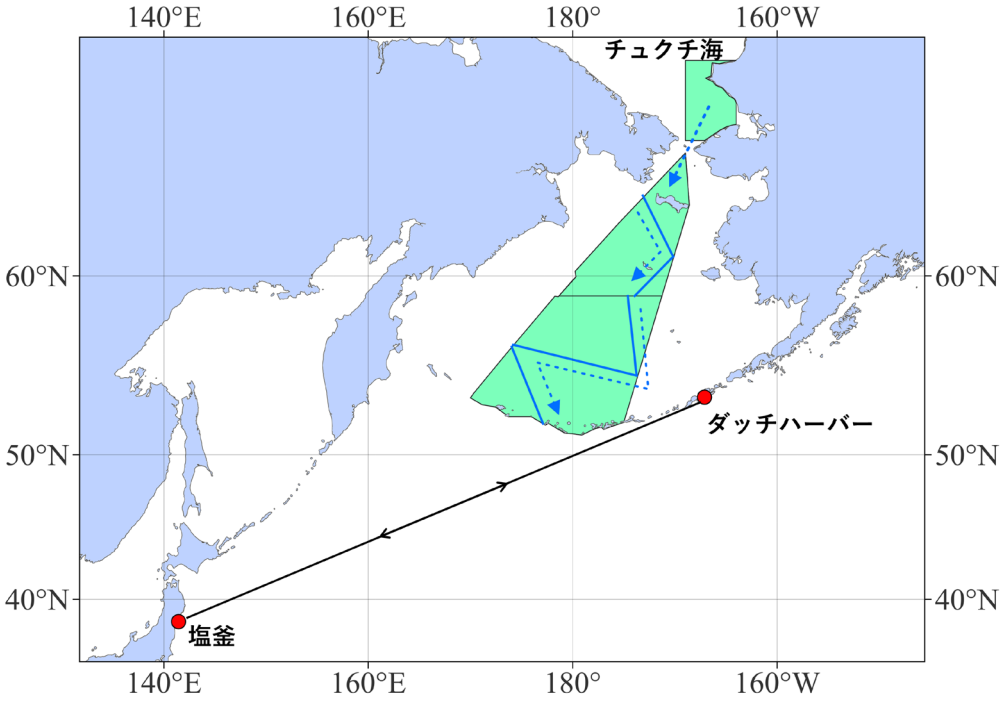

図1. 2025 年の調査海域(緑色;米国排他的経済水域内)、調査コース(青色太線)、往復航海コース(黒色)。

2.4. 国際調査員:

IWC 科学委員会が指名した下記の調査員によって調査が行われます。

村 瀬 弘 人 ; 調査団長、日本・東京海洋大学(IWC/POWER 運営グループ)

Jessica Crance; 米国・NOAA/AFSC(海洋大気庁／アラスカ水産科学センター)

Bernardo Alps; 米国・NOAA/SWFSC(海洋大気庁／南西水産科学センター)

吉 村 勇 ; 日本・IWC 選任国際調査員

2.5. 調査船 :

第二勇新丸(747 トン、(株)共同船舶所属、大越親正船長以下 16 名)

2.6. 実施機関 : (一財)日本鯨類研究所

写真:過去の調査の様子

海面で呼吸をするシロナガスクジラ（2022 年）

希少種とされるセミクジラの頭部（2023 年）

海面に浮上したナガスクジラ。右下顎が白い。（2023 年）

アリューシャン列島付近で撮影されたザトウクジラの尾びれ（2022 年）

米国製の音響観測機器を投入する国際調査員（2023 年）

観察台から鯨種を確認する観察員と国際調査員（2023 年）

以上